

体験者の貴重な証言 3

戦争

■朝日新聞テーマ談話室編

朝日文庫

戦 争 3 体験者の貴重な証言

朝日文庫

1990年3月20日 第1刷発行

編 者 朝日新聞テーマ談話室

発 行 者 八 尋 舜 右

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131 (代表)

編集=図書編集室 販売=出版販売部

振替 東京0-1730

© Asahi Shimbun 1987 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-260588-X

争 3

体験者の貴重な証言

朝日新聞テーマ談話室編

表紙・扉 伊藤 鑑 治

目次

Ⅶ 恥じるな、あなた方は英雄だ

ケヤキたちの行方	木代律子	35
炭鉱で落命した人々	滑川又夫	37
よいお友達でありがとう	春田睦子	38
詩を吟じつつ逝った女教師も	滝田一之助	39
ドゥーリトル初空襲	小岩一栄	40
国に殉じた中学生	佐藤長幸	42
愛してくれた人々、今は亡く	飯尾和敏	43
なぜ言えなかった	雨宮仁	44
不気味な零戦の砲口	斎藤幸一	46
息せき切って妻	熊谷文男	47
ビルマで逝った見ぬ父のこと	桜井節子	48
宮様小隊長と工兵監	森喜久雄	50
少年兵を置き去り	鈴木正昭	51
開けた箱には板切れが一枚	安西均	53
幸い五百発にならず	作間孝	54
暗夜の行軍中の惨事	瓜生讓三郎記者	55
人間的弱さの現れ	古田吉彦	58
ヤドリセンノニシモフラバ	桜井良和	59
女中兼下男の軍務	平松武紀	60
清田移		19
小林栄太郎		21
日野戀		22
玉田甚夫		24
八代美栄子		26
三富秀子		27
労働動員と女子挺身隊		28
高柳麗子		28
永沢道雄編集委員		28
平和日本の到来を待たずに		30
内山滋		33
小島範浩		33
涌井悦子		33
内山豊子		33
金沢和雄		34
男の子のあわれみ		33
カモを撃つ米兵		34

父を亡くしたあとのわが家

通信検閲で営倉

わが分隊の「沖縄」泥棒作戦

同胞に備えた実弾

息子の戦死を信ぜず

父が母に残した話

ミナス一号井は今も稼働する

陸戦隊の非人道的行為

米国収容所に拘禁された父

心理作戦の指導書

大衆は要領がいい

フランス軍の盾にさせられ

私の犯した愚を繰り返すな

さまざまな教師像

昭和一ケタの不信感

集団登校のあの思い

戦後教育の原点をたずねて

時代の動き知ろう

こんな教師もいた

原貞治

なぜマッカーサーか

岩淵仁子

87

国上郁夫

いつも笑顔絶やさず

井上進之輔

88

ほんち・えいき

強制の図式と国旗

細田亜津子

89

奥山裕司

人間という名の前進

児島由記

90

狩野広

戦後の小学校での「ガツカ」

田中寛子

91

黒木弘子

過ちを改むるのみ

境学

93

井上謹治

石もて朝鮮人の子を追う

佐々木フミ子

93

岡田実

疎開先の小学校で

大森共子

95

中村徹

これがビルマ最前線の姿だ

稲葉茂

96

小泉好太郎

「死に場所を与えたんだよ」

山田満寿雄

98

榎本武夫

倒れた敵兵の断末魔の気迫

本多弘太郎

99

阿部武二郎

凶兆づくめ、サイパン作戦

川上定

100

茂木義夫

「死んで寄り集まっても当然」

草間登

102

松原勇吉

極限状況下での人肉食

松井覚進記者

104

池崎和雄

ツボの陰で拝むクーニャン

薬師光一郎

107

渡辺弘子

司令官が負傷した新兵器実験

堀尾貞志

108

長淵和夫

鉄帽で拾った命

宮本愛雄

110

山崎馨

赤い丸印は心臓、絶対突くな

河野正人

112

武雄鉄次

わが独立山砲隊のガス弾砲撃

中牟田勝三郎

113

足立貞子

86

「阿波丸」で言い残したいこと

滝田賀一 斎藤喜代子

長良と「海ゆかば」

鈴木友夫

氏名確認もされず

飛田俊夫

チッタゴンに眠る日本軍人

半田一

スマトラ油田の部隊長自決

岡田英彦

草履を作る少年兵

平尾均

父が歌った海ゆかば

鳥居塚規子

カウラ原頭を鮮血で染めて

松尾茂光

白旗は重し敵陣近し

永沢道雄編集委員

恥じるな、あなた方は英雄だ

関山栄次 織田博

オリの中の元参謀

野北九州男

ステッセル將軍と牛島將軍

中野滋

最後の芋と老婦人の金時計

河村俊郎

心から謝罪する

三上浩司

飢えと馬の死体

大塚正

現地調弁という名目の強奪

松村龍雄

115

VIII あなた方に慈悲はないのか

待つて待つて待ちくたびれて

神崎菊枝

「誉れの子」のメダル

島田道男

父を、戦友を、知りませんか

植村葉子

森川寅夫 高井俊彦

小山照夫

平田耕造 今津善一

鈴木靖子

赤縄で巻いた骨箱

池田鍊二

ノモンハンの捕虜

辻安雄

阿波丸事件のナゾ

松井覚進記者

軍艦旗に包まれることもなく

新城祐吉

食膳に載った一丁のけん銃

渡辺兼美

御霊伝達と遺骨伝達

沼尻茂子

埋めた名刀五本

赤沢薫

最後まで飛んだハッピー号

植木弥七

敗戦後の職員室で

河村房子

終戦直後になぜ脱走したか

中原精一

168

166

165

163

162

161

160

156

153

153

150

148

147

高山線の車中で

トラの威に負けない心意気

カモ撃ちの米兵と父

登記簿を死守した登記官

六月二十日を思う

ガリ版雑誌と特高

あなた方に慈悲はないのか

賛美歌と愛国行進曲

深夜の下宿の招かれざる客

村八分で憤死した教師夫妻

まだ自由だった学園

ケンペイタイ!

人間という意識

覆い隠すことは罪

この欄を生かす道

一般大衆は戦争賛成だった

教育とマスコミと時代の言葉

心の支えなくして

心の正しい歯車を

森前陽

奥田和嘉男

高橋美佐子

田島修身

辜天徳

太田耕造

山下三郎

加藤敏明

岩田晴雄

国分真三

星貞一郎

関口勝雄

阿部壮夫

河辺美佐

河村真一郎

福島都志夫

姫島忠生

安島克久

山下実若

ちようちん行列

『大東亜共栄圏』と脱走兵たち

われらに続く世代へ

山津純之 熊谷徳一

着々と戦争の覚悟と準備

キリスト者として

捕虜の人権を重んじた中尉

「おかawaiiそうに」と言った人

「おかawaiiそうに」のいきさつ

西洋人形を切った乙女たち

青い目の人形と子どもの心

武田英子 斉藤奈都子

「おかawaiiそうに」——所感と異聞

工藤為久蔵 吉野徳恵

村岡喜三郎 荒木直義

日本婦人とソ連兵の心中事件 中川完二

樺林山中に追いつめられて 牧野秀夫

女たちの通化脱出 田中正

国府軍の装甲列車で 村上綾女

恒成正敏

今沢栄三郎

萩原久雄

須藤泰雄

板橋俊典

豊原敏郎

吹浦忠正

秋山邦雄

鈴木和子

河野敏雄

罵詈雑言の中、日本人を守る

永島重俊

220

猛吹雪にたたずむ

滝沢金治

222

帰心、ラーゲルを抜けて

田村貞一

223

弾を忘れた兵隊

寺島文雄

225

興安嶺のある独立守備隊で

多賀潤

226

ボケット内の写真

木村鉦一

227

使われた刺突爆雷

小熊伸平

228

「誰何なくとも発砲すべし」

丹野美登理

229

加害者と被害者

山田一郎

231

星一つの兵卒がストライキ

丸山孝四郎

232

衛生上等兵と軍人精神の発露

籠谷忠恕

233

潮岬沖の魚雷攻撃

菊池香

235

ネグロスの死闘を生き抜いて

小久保（旧姓桜井）弓雄

236

本当の実戦教育

坂田真太郎

238

野戦病院の一コマ

久田二郎

239

最後の米飯を分け与えた兵

河村幹雄

240

死と人間の本性

松鶴新二

241

「おお、ファーマーか」と米兵

川上定

242

ミギヨリウテツ

田中輝彦

244

波間に遠ざかった二つの顔

土橋春生

245

信じられますか

早坂功

247

銃をとった台湾の師範学校生

園田哲朗

248

村民も見た誤認攻撃

上野実朗

249

粗雑きわまるジャンク輸送

志村富寿

250

山城と同盟国の盟主

荻原統一

251

私には恥辱の時代

瀬川負太郎

252

十二月八日の上海

上条勝

253

「人肉食」信じたくない

志村登 小川保

254

40年、徽章をつけず

柴本勝弥

257

母を恋い、飢えに苦しみ

秋元美奈子

259

井上はるえ 市島陽子

島谷春枝

263

観光旅館の学童と教え子たち

篠原学

265

母が造った防空ごう

林妙子

266

東京に帰った子らは

望月努

267

私がもし死んだら

只松千恵子

269

「野荒らし」と呼ばれた母親

佐藤秀人

270

父の形見のコイ

樋口トエ

270

軍縮、貫き通した提督

松井党進記者

271

IX 母の嘆きは風化していない

スンバワ島、中隊長への逆襲

佐藤公保

277

戦場の鉄道―^{えつかん}粵漢線と泰緬鉄道

279

小口正一郎

渡部秀男

282

撤退中、集団自決した看護婦

藤又正義

282

将校が兵にわびた食糧運び

永井茂

283

暗夜、目の前に大勢の敵

井上幸一

284

一網打尽に捕らわれる

谷川春義

286

戦艦大和のある応召機関兵

青木幹夫

287

レイテ決戦輸送

下田正雄

289

伊十六潜沈没の日付

河村寿美子

290

殺した仲間の内臓を切る

菊地真一

291

生命維持本能のみ

武田裕

292

「愛サレンダー」と言いなさい

高橋忠

293

志願するんじゃない

小沢博

295

虫食いに荒らされて

野北九州男

297

左近の桜、右近の橘

太田文平

298

殴られた数は二百六十四回

坂田毅

299

ホモ班長とリンチ

木村三山

300

衛生材料の行方

宮本忠孝

302

桜と橘の意味は

林由男

302

アカナワと人の心

辻野良子

304

ハイ、陸軍大将です

井野正道

305

今日ロシアと戦争が

服部賢治

306

「海陸軍とはいわぬ」

今村啓一

307

赤紙はこうして舞い込んだ

松井党進記者

309

命のほうが大事

前田静雄

313

考課表に「下士官適」

山田善一

314

看護婦が見たリンチ・フケ飯

福田ミチ

315

精神病棟に入った彼

小室薫

316

阿波丸で往復した25日間

林鈴雄

318

阿波丸とすれ違う

鈴木次雄

319

いつまでもお元気で

平尾浩子

320

ルソンで果てた夫よ、兄よ 清水鶴子

鈴木千賀

322

四十二年の歳月を経て

アバキャン中尉健在

望郷の思いを柱に彫り込み

なぜ彼女を置いてこなかったか

母の嘆きは風化していかない

八路軍にいた童顔の日本兵

ヒイックと夫人は卒倒した

死を命ぜられた青年の心境

山中の寺に響く「鎮魂の曲」

戦争の話をしない父

時代の空気伝えよう

スハルトさんの謝意

ときほぐしてほしい

亡き父に代わって

不運にもめがね違い

決意させたものは

盧溝橋事件、北京と松江の光景

河野通弘

動員中学生が見た「雲の墓標」

穀つぶし呼ばわり

安竹宮の戦争体験

ジャンク船建造の実情は

五日で解体運搬したカノン砲

妹は黙して語らず

太平洋を東へ渡った人形は

ピンクのロウ人形のように

動物たちと戦争

運がよかった父

ムソリーニへ礼状

さきやかな加害者

裏山の防空ごう

彼をしかることはできない

「六級生」のらく印

「米英撃滅」かけ声かけて走る

戦時中の女学生

何とも純真で無知で

相模ダムと強制連行

「引きつけたたくは勇将の道」

五十川和

渡辺高

鳥海豊

松村宏

岩崎彰代志

野崎清

森本城史子

鈴木たづ子

井上京子

友田昌二郎

押切富栄

門川倅子

佐藤六郎

遠山健

西村絹代

大森拓二

橋本登志子

藤井将貴

ただ金庫だけが

橋を駆け抜けた火

あの毛布と白砂糖

関特演の一情景

父と二人、満州飢饉行の半月

親に捨てられ、ソ連兵に撃たれ

一足先に関東軍家族

モンゴルで、ウクライナで

江部忠夫

雪に消えた二つの小さな魂

戦車は小舟のように揺れた

竜門山の立ち往生

老女の小さな布袋を徴発

何をいいたかった？

息をひそめ草の葉ずれも忍び

カーニバル島にて

シンガポール攻略戦に参加

わらじばきの兵隊

いかに上官とはいえ理不尽

河合八千代

関根哲人

緒方ユキ子

長谷川春峰

藤沢幸雄

大野和子

三尾宇田子

針持健一郎

川上志摩子

須原清一

湯田重孝

仙波藤吾

滝沢金治

稲葉茂

近藤新一

若月貴久男

竹見源太郎

野北九州男

川を隔ててつかの間の休戦

八路军に捕らわれて

グアム島の軍属部隊と残存兵

前場喜六 土山弥太郎

フィリピン山中の飢饉行 西原敬磨

「死ぬときはいつでもある」

ごまかしは効かず

カタツムリのおかげ

足立源司

佐藤知

坂本正雄

仲摩徳義

太田勝

X 母よ妹よ、狂った孤独の少年よ

わが尻をなでシベリアを思う

元憲兵らが赤旗の歌

死体を見たのか

あと一日生きのびていれば

ノモンハンの重傷者救出

「静謐」の二文字のために……

敗戦後の樺太の経済体制

山本善丸

平尾均

内山エミ

左子エミオ

森居鉦作

小野沢寛

福富節男

407

409

410

413

416

417

419

423

424

426

427

428

429

431

431

ガサ馬に助けられた一等兵
馬だけは食えず
悪疫流行で薬殺
苦力に助けられて
糧まつ倉庫破り
「餓了」を訴える
中国のマタハリ、髪飾りの姑娘
マラリアで淋病快癒
ヤア、すみません
中国捕虜の慰霊祭
永定河畔、斥候に出て命拾い
丸太をさして高射砲
電流刑、スピンドル油刑
解放軍に頼まれ帰順工作員に
戦に慣れた下士官
幼子の運命を狂わせたもの
戦う祖国の血液
閃光……脳神経刺激する不快感
髪がパーマのように

中牟田勝三郎 432
師岡永造 434
成田武夫 435
常木金雄 436
鈴木竹治 437
吉田幸 439
川上登喜雄 440
金城盛昌 442
佐護恭一 443
垂木煥文 444
紙合隆夫 446
秋葉行雄 447
加藤金治 448
茅根巴 449
子成場家三 450
川上定 452
住田睦雄 453
和田三千代 454
小松峰子 456

私は「不発原爆」監視の決死隊
勝手にしゃべるな
ウサちゃんはどこへ
郵便ポストに次々と反戦文書
スパイと疑われて
よみがえった悪夢
十二月七日の夜
浦上に父と弟の姿を求めて
母よ妹よ、狂った孤独の少年よ
中山伊佐男
香田寿男
松本光和 457
吉田一人 458
森馨子 459
石田寿参百 460
渡部秀男 462
石井順子 463
小泉好太郎 465
内田亨 466
東京空襲に生き残る
こんなのウソだと父を送る
結婚相手がいなかった
天皇のお身代わり
名誉ばん回に努力
私は補充兵たちを殴った
召集延期の申請……私の体験
終戦の翌日から演習
危機一髪の自殺未遂
池田鍊二 480
駕尾武治 479
関博蔵 477
熊井雅男 476
森喜久雄 475
衛藤一 474
益子あつ子 472
山谷雅子 471
山本悌二郎 470

入浴にきた特攻隊員

堤建造

481

炭鉱で働いた捕虜

河野徳男

483

教官の悪口書いたばかりに

勝山光郎

484

営倉から出て「軍務に精励を」

久永成義

485

非難攻撃の匿名氏に訴える

東史郎

487

責任追及しない日本は嫌いよ

清野智佳子

490

大人たちの義務

境 学

491

死者に申しわけない

高野ゆう子

492

「君の身代わりに命を捨てた」

細川隆

493

座談会・語り継ぐ真実

495

入江徳郎

高木俊朗

秦郁彦

508

マスコミがあおった軍国主義

吉田彰男

509

ガダルカナルよ、幽鬼の兵よ

石田矢八

511

ラバウルの大隊長

大野三郎

512

空母翔鶴が沈没したとき

杉野守誓

514

司令官逃げ、混乱のラングーン

武田裕

515

「十三歳以下は殺せ」の命令

ジョージ・福井

517

ビルマの捕虜収容所に日本酒

三浦徳平

518

無謀航路の強要で二隻失う

上島久人

519

ある元海軍飛行兵曹の告白

水口昭一

520

天国に一番近い島で

戸塚恭一

523

戦病死にならない例

高田次郎

524

大阪駅頭、若き次兄との別れ

藤岡美智子

525

平頂山虐殺事件と私の両親

渡辺楨夫

526

父の残した手帳

清水寛子

528

弟は英霊ではない

田崎広夫

530

ガ島生き残りの夫「哀」の一生

長崎美枝子

531

死者からの赤い飯

原 豊

532

丸帯一本、必死に守りぬく

大形時子

533

銘刀は海の底に

半田匡一

535

朝鮮、台湾兵の終戦

小島茂

536

大島の朝鮮の人たち

栗原芳子

537

ガス弾?の大量投棄

東幸一郎

538

歩三とは無関係

大坪義幸

540

度胸のいい米兵

中野滋

541

陸海軍の帽章の規程

原 剛

542

航空隊深夜の誤報

下田直孝

543

砲兵の射撃号令

中村正治

545

無謀な突撃、無能な連隊本部

546

河野正人

上野実朗

作戦中、両親に会えた少年兵

田口鉄治

548

「戦争」を読んで

達子潤

549

ふれ合いの場を

久田二郎

551

国民的友好外交を

竹岡勝美

552

「死」を生かすこと

村松広秋

西小路正

552

戦争と新聞

永沢道雄編集委員

555

文庫版あとがき

永沢道雄

563

戦

争

3

体験者の貴重な証言